

時節極端苦しい記事はやめにして
差かい儲物を集めてみました。山
の記録、旅の語など、夕涼みでも
しながら楽しんでもらいたいと思
います。



デイモンテイニ神父

たと考へている人が世の中には多いと思ひます。そんな人々は登山について全然何も知らないか、或いは登山の目的があまり理解しない人です。まず登山の目的について考へてみますと、それは人によつて少しは違ひかも知れませんが、大体三つに分けることができるのではないのでしょうか。

第二に登山に知的な訓練に役立つ。夫主様の御創造の靈妙さ、甘美さ、真面目な登山者は遊んでばかりいなくて高山の動物や植物を観望を勉強します。その上登山に際しては色々な知識が必要ですので、例えば野營の方法、方向の発見、地図の読み方、救急手当の常識、天候の予知、クライミングの技術など……。しかるればかりではなつた場合、自分のこれまでの生活

第一に登山をすれば体が丈夫になります。全身をよく運動させて清純な空気を呼吸し、良い食物をも多くの原因を与えます。

第二に登山は精神的な面に於て、敢めようとする勇氣が湧いて来ます。これは町の中では全く与えら

第一に登山をすれば体が丈夫にありません。

第二に登山は精神的な面に於て

敢めようとする勇氣が湧いて来ます。これは町の中では全く与えら

ゆつくりと登っていました。このようにゆつくり登るといふことは登山の大切な規則です。それらの点家注意したら誰でも普通の登山りができます。しかし或るグループは特別な難しい道を選んで山に登ります。学校の登山部なんかはその例です。その為には特殊な技術と設備が必要とします。勿論、普通の登山よりも難しくて危険ですが、もつと面白くて有益です。それは勇氣とチームワークの精神。あつと向上させるからです。登山にはこんなにあくさんの

奴々は驚い、ちまたにあつて涼しく過すことを望まねばならぬ。素人は陸にたつぷり打水して床には雪霽の軸でもかけ、原しそうな花をいけ、そこで、きちんと着てたつたにあつていても涼しいのである。常體的に蒸氣で雪霽の上にねそべつて水でもしやぶつてゐるのが、これが一番涼しい雪なのだが、これが一番涼しい雪なのだ。

シユン湯のたぎる釜の前にすわつ　こんな人間にかぎつて何時までも

木曾の馬籠を訪ねて

加地安寬

血につながら ふるさ
心につながる ふるさと
言葉につながるふるさと
これは島崎藤村が生れた本郷の隣
里の本陣跡に新しく建てた「
藤村記念館」の思ひ大い腕本門
を入つて正面にある白壁の古蹟に
はめこまれた二民四万は左殿板
に刻まれている文句である。藤村
の自筆であつた。私たちがここを
訪れたのは七月も末の一日、晴い
陽照がありまきから露晴らしいス
ポーツです。これまでにもたぐさ
んの有名な人たちは登山をやしま
した。ペルギーのレオポルド王
は登山をするのが大好きでした
し須賀のローマ教皇ピオ十二世も
若若い時には登山されました
みなさんも学生時代から既に登
山者になつたことをすめず、そ
うすれば主様について作られた
大自然と、自分たちの間の有縁と
の登山者の心をもつと深く知
り、また自分の弱さや小ささをよ
りよく理解することができるとし
よう。

自分の本当の姿を価値を知る
といふことは人間について大要に
必要なことです。登山の風景はそ
れだけでも充分なと思ひます。

午後四時少しも強く降るうとする
頃であつた。そしてその白壁の面
には壁に立つ樹の若木がその葉
の影を落としていたし、やや湿り
を帯びた土の上には青梅の実が二
つ三つ転がっているのが、いかに
も藤村の生家に来たというものの寂
かな鬱鬱感を感ぜさせてくれた。
とは言つても江戸時代三百年を遡
じて十七代も続いたといふ宏壮な
本陣屋敷がそこに残っている眼で
はない。明治二十八年とかの大火
に焼失してしまつて今は三百坪ほ
かりの一畝の空地だ、敷石の幾
つかが残る、それを偲ぶすがで
あるに過ぎないのだが。そして今
ある記念館は昭和二十二年の秋に
真実、藤村の「血」にながり、
「心」にながり「言葉」になが
つた馬鹿の村人たちが、小学生
に送るまで、或いは社を削り、土
を運んで郷土先輩の墓に葬けた
「記念館」なのである。決して立
派なものではない。人の目を驚か
すような大きなものでもない。そ
れだけに又、藤村が常に心に温め
ていた「簡素」なるものの美しさ
の結晶の様に思われた。さつき
の土界から右に折れるところには
草薙に覆われた小さい池があり、
すぐ側から奥行一関半に開口十間
ばかりの横長で四面風な建物に導
かれた。壁の部分の他はずつと巾
の広い腰高の明り障子が立てであ
つて、その一枚毎に島崎家の定紋
木瓜（モコウ）のしるしが朱色で
一つずつ描いてあるのが白紙を通
す西日に透かんで散しかつた。思
へば藤村もこの紋様によつて縁取
られる全ての過去を背負つて生れ
て来たのである。室内の壁面には
藤村を記念する品々が掲げてあつ
た。次男彌三氏の描いた肖像画に
足を留めたり、佐藤春夫の筆にな
る藤村詩「初恋」などとはみんなで
声をあげて詠んでおみた。私は以
前にどこかの邸宅でこの詩を木彫
人形にしたのを見たことを思い出
す。何の変哲もない人形で紺がす
りに華麗はきの太郎さんに、赤と
黄色の荒い縞縞の着物の花子さん
が真赤い林檎を一つ渡しているに
過ぎないものだったがその初々し
さがひどく私をとらえたものだつ
た。そんなところで幼なかつた日
の藤村の面影を描いていた私はや
や奥まった所に彼のブロンズの像
を彫出した。晩年のものであるら
しく麻が何か着かれた制服に背を
向く結んでやや斜め前かがみにな
つたその姿は全身で何かを患患
するよであつた。藤村は非凡な
人であつたが故に、常人の思い及
ばない程な多くの深い悩みを一身

に引付けてきた人であつた。そして像の側の明り輝子の出家には古銅の暈に穂の長い黄色な野草の花と墨き葉もしするばかりな桔梗の数輪とがひそやかに添けられてあつた。

日本陣跡の東北隅を形成している隠居所と土蔵一棟とは幸ひ数度の火災にも焼損をまぬかれていた。その隠居所の二階で少年藤村は父から論語の義理を受け手習ひを授けられたといふのである。屋裏には杉皮を材木で抑えて丸い大きな石がのせられていた。全て風雪に耐えんが爲である。ひとり扁擔に限つたことではないが、吳興讓から書展へかけての木曾路ではこの様な屋裏の下で人が住むのである。土蔵には藤村の蔵書、原稿、身の廻り品など四千余点が階上階下四室に陳列されていた。私たちは改装された内部の照明設備によつて彼の作家としての生涯を辿ることができた。初期の詩集に、長篇小説の構想や本文の原稿に、彼の「こころ」が「言葉」に認め徹つて結晶してゆく姿をみる事ができた。画家がカンバスの上におく顔の具を運ぶのと全く同じ間道が體々と感じとられた。画家は時として今おいた色が気に入らないならばそれをナイフで削ることがある。藤村もそれをやつてゐる。例へば「夜明け前」の冒頭の二節にある「木曾路はすべて山の中である。……ある所は數十間の深さに臨む……」の「深さ」はもと「谷」であつたのを直したのとわかる。どちらでもよいような二つの語の相違に実は文藝の秘められた機微があるのに違いない。ねむの花の葉はあれ以上濃くてもくてもいけないのである。又その晩年ヨーロッパの旅に出てギリシャの風土と人情に西洋精神の古い眼を見出そうとした彼が東洋乃至日本のそれと比較しつゝノートに鉛筆で簡潔書きにしたものの最後に「……このことは心に深くひそめて考えねばならぬ」とも書いていた。この「心に深くひそめて考える」といふのは常に藤村の態度であつた。そしてそれゆゑに安楽な道ではなくて苦惱の道であつたとするところに一人の究道者も似た彼の生命がある。彼の蔵書の中に人際呂、西行、芭蕉に類するものが多く目につくのも偶然ではなからう。そんな事を思ふは日本美術の伝統の中に彼が占める系譜もどうやら明らかとなつてゐる。彼らは苦悩する人であつた。

土蔵を許した私たちはかなり暖かくなつてゐた。屋敷あとの土壇に燕を遊ばせる老翁などと藤風の言葉を交しながら村落の北にある水昌寺を訪ねることにした。細い路地に舞れて遊ぶ子供たちは藤村の血につながるを望んでゐる。やがて石階を登つて大きな本堂の前に出た。もうその頃はかなり日も傾いて古木に囲まれたその辺りは薄暗くなつてゐた。しかし私たちはその前にそろ長く立つて耐えなかつたのはそれ故ばかりではない。世の波瀾の抗し難きに堪えしつゝ遂に狂気の陥つた半蔵が扉に放火して、村人にその体をたぎとめられたと「夜明け前」に記すのはこの當である。その半蔵のモデルが藤村の肉親の父であることを思ふは、如何なる愚いて藤村が「夜明け前」の筆をふつたかは察するだに余あるものがあつたらう。山門を出て十数歩、私たちはそこに藤村の墓を見出した。子供たちのものと並んで四寸角、高さ約三尺の石塔に、「馬酔木樹之墓」とある。唯それだけである。しかし竹間には夏草の花が染れるばかり排けられてあり、その前には谷の靈塔に手向けられたものか藁と麻がらの燃え残りか散らばつてゐた。近からしばらくと絶えていた鶴の音が降るやうである。幼くて村を出た藤村はしかし村を捨てたのではないかつた。常に案じつづけ俵びつづけていたのだ。現に今もあるように旧屋敷跡のすぐ西隣に家を立てて長男耕雄氏を葬墓させ、やがて自らも祖先と同じ墓の土となる人であつた。藤村の生涯は離れがたくこの木曾山中の寒村にづながれてゐたのだ。「心にづながる」とも人間とに反叛を感じつとも、例へば両親の墓から出られないのと同じように、ふるさとの土とづながつてゐるのもあつた。

そんなことを思ひつゝ私たちは水陣前の休憩所にもどつたのであつた。そこには土間の開軒裏に少し煙をたてながら燐かばかりの火が

いけてあつて、太い需要竹の目元からは大きな鉄釘が掛つてあつた。鉄釘の上には油煙で真黒なつた木彫の鯛がとりつけてあつた。その格子に腰を下ろして熱い茶葉の御馳走になつた時、こゝ数日來三俣澤から槍ヶ岳へかけて巖走の旅を試みて來た私は口にてこそ出さなないが、極度の空腹と疲労とを感じていた。今はもう不必要となつた非常食用のラスクなどをかじりながら暫時にして、茶碗を手にして、今度は勝手に粥を新しくて鉄道の湯を注ぐといふ有様であつた。

やがてゆつくり休ませてあつた私たちは礼を述べて道路に立つた。中仙道である。幾世祖の長い間、このような夏の夕暮には特に賑つたであつた古い宿場の跡である。往來の街道の有様も今は道の石畳にそれを偲ぶのみである。

本陣の大きな屏も既に閉じられた。そこを立去らうとした時、行く手のだらだら坂を登つてくる馬と人に会つた。荷をつけた雨が夕暮の門前を過つてゆく。この土地の人にしてみればなんの不慮議もない明け暮れのできことが珍しいものに思われる熱い方である。そのうしろからは華川龍を背負つた遊藝さんが不慮に表われて坂道を登つてゆく。それらの人たちの交してゆく夕べの挨拶にも「夜明け前」の言葉は今なお生きている。

馬馬は何に驚くかして聲んにはねゆる。村の四つ辻の広場は一時賑わしくなる。その騒ぎも一しきりおさまると仔細にも田川の水をふくませて並べて向うの土堤の道へ消えて行つた。あたりには急に真の静寂がおし寄せて來た。その中に一すじ白く残る爪先上りの街道、屋根に石を置いた側面の二階、寺の森、そして蠟の声……。

私たちはバスを待つ圓のしぼろを、恐らくは再び訪ねることもないであらう木曾の尾籠の夕暮れの一と時をそれぞれ心の奥に焼き付けたことであつた。

